東海学院大学研究年報　5　(2020)
info:doi/10.24478/00003689

【論文】

親の養育態度が大学生の容姿に対する自己評価に及ぼす影響
－子の性別に着目して－

安達　悠子[1]・山本　久美[1注1]
([1] 東海学院大学)

要　　約

親の養育態度は子の容姿に対する自己評価に影響を及ぼすことが指摘されているが，容姿に対する自己評価には性差が示されているにも関わらず子の性別を踏まえた検討は少なかった。そこで，本研究では大学生を対象に，親の養育態度が容姿に対する自己評価に及ぼす影響を子の性別に検討することを目的にした。大学生 115 名を対象に質問紙調査を行なったところ，容姿に対する自己評価のうち「容姿肯定」と「容姿無関心」は男性より女性で低いこと，「他者意識」は男性より女性で高いこと，男性では過保護な親の養育態度が容姿に対する自己評価の「容姿肯定」と「他者意識」に正の相関にあることが示された。男性は，発達段階が進むことで親の養育態度の影響を再び受けるようになった可能性が考えられた。

キーワード：大学生，容姿に対する自己評価，容姿志向性，養育態度

はじめに

容姿志向性

顔の造形や体型など自身の容姿に無頓着の人もいれば，気になって仕方がない人もいる。また，自分の容姿を高く評価する人もいれば，低く評価する人もいる。人によって違うこうした「自分の容姿にどの程度関心を持ち，評価しているか」を容姿志向性と言う（平野・井上, 2006)。

我が国と諸外国の若者の意識に関する調査(内閣府, 2019)では 13 歳から 29 歳までの男女約 1000 名を対象に自分についての誇りの有無を明るさや正義感など 10 項目で尋ねており，「誇りを持っている」と答えた割合が最も低かった項目は「容姿」で 31.9%であった。すなわち，約 7 割は自分の容姿に誇りを持っていないことが示された。また，同調査では現在の悩みや心配ごとについても尋ねており，「容姿のこと」は約半数（54.7%）が心配と答えていて前回調査（内閣府, 2014）が 50.3%であったことに対して微増している。また，調査対象者の年齢幅がより狭い 18 歳から 24 歳までの男女約 1000 名に行われた第 8 回青年意識調査（内閣府, 2009)でも，悩みや心配ごとの有無で「容姿のこと」は 11.1%が有と答えており，2004 年の調査の 6.3%から高くなったことが報告されている。こうした資料を見ると青年の容姿に対する関心と不安は高く，またその傾向は近年横ばいあるいは微増している可能性がある。

青年期は容姿に対する関心や不安が高いが，青年期のなかでも年齢差と性差があることが指摘されている。古くは島（1988）が高校生と大学生を対象にした調査で，容姿の自己評価で「劣っている」の人数割合は大学生より高校生で高く，男性より女性で高いこと（高校生では男子 34%で女子 49%，大学生では男性 16%女性 29%）を示した。また，髙坂（2008a）が中・高・大学生を対象にした調査で，「身体的魅力のなさ」に対して高校生は中学生や大学生よりも劣等感が高く，女性は男性よりも劣等感が高いことを示した。田中・田山（2013）では，男女大学生を対象に，「容姿についての欠陥や過剰な心配や強いとらわれ，過度の確認行動や容姿についての欠陥をカモフラージュするための行動，社会的な場面からの回避や安全を求める行動（Littleton, Asom & Pury, 2005)」を意味する身体醜形懸念が高い大学生の対人的な認知の特徴を探索し，その結果，身体醜形懸念は女性が男性よりも高い値にあることを示した。このように，容姿に対する自己評価は青年期のなかでも大学生は高校生に比べて持ち直し，女性は男性に比べて容姿に対する自己評価が低いという違いがあることが示されている。さらに性差に関しては，髙坂（2008b）が容姿・容貌に対する劣勢を認知したときに生じる感情の発達的変化には男女差があり，中学・高校・大学にかけて，男性は優れたものを攻めてその後に劣性の無視を経て劣性の受容に至るが，女性は優れたものへの憧れから自己否定を経て劣性の受け入れに至るとその過程を詳しく記述している。

親の養育態度

養育態度は，親などの養育者が子どもを育てる際にとる態度や行動で，子どもへの対応の仕方やしつけ方，子どもに対する感情のもち方，表現の仕方の背後にある構成概念として捉えられる（南, 1999）。自ら受けた養育について振りかえって評価させる自記式質問紙の開発は1979 年に Paker らが発表した Parental Bonding Instrument（PBI）などが初期のものであり，PBI は現在でも親の養育態度の測定によく用いられている（Parker, 1990）。Parker はそれまでの先行研究から養育態度に 2 軸が想定できると考え，質問紙の改変を重ねて最終的に 25 項目からなる PBI を作成した。25 項目のうち 12 項目が養護（care）の得点で，13 項目が過保護（overprotection）の得点を示す。

PBI は子の神経症の一部に関与することが報告されている。例えば，不安神経症（Parker, 1981），神経症性うつ病（Parker, 1983），特性不安（Parker, 1986），神経症を測定する精神的健康調査票（GHQ）（竹内, 1990）に，養護の低さと過保護の高さが関与することが示唆されている。国際疾病分類（International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems:ICD-10）で精神症障害に含まれる醜形恐怖症は身体醜形障害や身体醜形懸念とも呼ばれるが，これに関しては臨床群と健常群において量的な連続性を有する可能性が指摘されていることから（Lambrow, Veale & Wilson, 2012），容姿志向性も醜形恐怖症の延長線上にあるという捉え方ができる。そのため，他の神経症と同様に，親の養育態度が子の容姿志向性に関与する可能性は十分に考えられる。また，我が国と諸外国の若者の意識に関する調査(内閣府, 2019)において，「自分の親から愛されている（大切にされている）と思う」と「自分への満足感」との間には正の相関が示されている。これは容姿に限定した結果ではないが，自分の受け入れに親の「養護」が関わっている可能性を示唆するものであり，この点においても親の養育態度が子の容姿志向性に関与する可能性が考えられる。

親の養育態度と子の容姿志向性との関連

親の養育態度と子の身体的魅力のなさへの自己評価や子の容姿に対する被評価経験との関連の検討は多くはないものの既になされている。例えば，大和・吉岡(2011)は， PBI への回答に基づき親から受けた養育態度によって大学生を「情愛と自立承認 Hl」,「情愛と過保護 Hh」,「無関心 Ll」,「冷淡と干渉 Lh」の 4 群に分け，身体的魅力のなさを群間で比較した。そして，「情愛と過保護 Hh 群」と「冷淡と干渉 Lh 群」が「情愛と自立承認 Hl 群」よりも得点が高かったことから，親から過干渉（過保護）に育てられると子は自分には身体的魅力はないと評価すると述べている。米倉・吉岡（2017）は，大学生を対象に親の養育態度を養護と過保護で測定し，また容姿に対する両親からの評価経験を記述させてポジティブ経験とネガティブ経験に分けて集計した。そして，自分の顔についての満足度と容姿に対する悩み度にも回答を求め，親の養育態度や親からの評価経験が子どもの顔についての満足度や容姿についての悩みにどのような影響を与えるかを検討した。その結果，母親からのネガティブな評価経験があっても，養護得点が高いと自分の顔についての満足度は高かった。また父親からのポジティブな評価経験がある場合，過保護得点が高いと容姿についての悩み度が低かった。ここから米倉・吉岡（2017）は父親の過保護は容姿についての悩みを軽減させる可能性があると述べている。父親の過保護が子の容姿志向性に関連することは，前川（2005）も専門学校生から大学院までの女子学生を対象にした調査で父親の過保護が体型不満を弱めたという結果を報告している。米倉・吉岡（2017）は，一般的に「過保護」は子どもの意志を否定し，親がコントロールしようとするためあまり望ましくない養育態度とされるが，「過保護」が，子どもにとって父親なりに自分に関心を向けてくれているといった認知につながることで容姿に対する悩みを高めなかったと解釈した。このように親の養育態度と子の容姿志向性との関連が示唆され，母親と父親に分けた分析も行われているが，子の性別を考慮した分析は見られない。容姿に対する自己評価が女性で低いことや容姿の受け入れ過程に性差が指摘されていることを踏まえると，親の養育態度と子の容姿志向性との関連は子の性別に明らかにすべきと考えられる。

目的

男女大学生を対象に，親の養育態度が子の容姿志向性に及ぼす影響を性別に明らかにすることを目的にする。

方法

参加者

A 大学に所属する大学生 115 名を対象にして 97 名から有効回答を得た（男性 51 名，女性 46 名，平均年齢 19.3（$SD = 1.7$））。

質問紙

容姿志向性：容姿志向性の測定には容姿志向性尺度を用いた（平野・井上, 2006; 付録 A)。この尺度は，容姿肯定（12 項目），容姿無関心（8 項目），他者意識（6 項目）の 3 因子で構成された。回答は，全くそう思わない(1)―どちらでもない(4)―非常にそう思う(7)の 7 段階評定であった。各因子を構成する項目の平均点を下位尺度得点にした。

親の養育態度：親の養育態度の測定には，Parental Bonding Instrument (PBI) 日本版を用いた（小川, 1991; 付録 B)。この尺度は，養護（12 項目），過保護（13 項目）の 2 因子で構成された。回答は，全く違う(0)，どちらかといえば違う(1)，どちらかといえばそうだ(2)，非常にそうだ(3)であった。各因子を構成する項目の合計点を下位尺度得点にした。養護因子の下位尺度得点が高いほど親は自分に対してあたたく受容的であったことを示し，低ければ拒否的で愛情が感じられないことを示す。過保護因子の下位尺度得点は高いほど親が自分を子ども扱いして自分に対して侵入的で過保護と評価していること，またこの得点が低いほど自分の自律性や主体性を尊重してくれたと評価していることを示す（北村, 1995)。

調査時期および手続き

2018 年 7 月に A 大学で授業の後に受講者に質問紙を配布して回答を依頼した。回答は任意，匿名であった。本研究は東海学院大学研究倫理委員会による事前の承認を受けた（No.2018-08)。

結果

因子の確認と全体の傾向

容姿志向性： 容姿志向性の 3 因子について内的整合性を確認するために各因子で Cronbach の α 係数を算出した。その結果，容姿肯定因子で α ＝ .92，容姿無関心因子で α＝.85，他者意識因子で α ＝.46 であった。他者意識因子に関しては，「12. 私の生活において，自分の容姿が問題になることはない」を除外すると α ＝.64 になった。当該項目は平野・井上（2006）においても他者意識因子に対して因子負荷量が最も低く，かつ容姿無関心因子と他者意識因子の両方に同程度の因子負荷量を示した項目であった。そのため，他者意識因子に関しては「12. 私の生活において，自分の容姿が問題になることはない」を除外した 5 項目の平均を下位尺度得点として以降の分析に用いることにした。因子間相関は表 1 に示す。

各因子の下位尺度得点の平均と *SD* を表 2 に示す。回答は 7 段階評定で 4 が「どちらでもない」であったため容姿肯定は男性（3.6）も女性（2.6）も否定的で，特に女性は男性に比べて容姿肯定が低かった（$t(95) = 4.85$, $p < .001$)。容姿無関心は男性（4.2）はどちらでもないに近く容姿への関心は高くも低くもなかった。女性（3.2）は容姿への関心が高かった。女性は男性より容姿無関心が低かった（$t(95) = 5.23$, $p < .001$)。他者意識は男性（4.1）はどちらでもないに近いが，女性（5.0）は他者を意識しており，女性は男性より他者意識が高かった（$t(95) = 2.88$, $p < .01$)。

表 1　容姿志向性尺度の因子間相関

	容姿肯定	容姿無関心	他者意識
容姿肯定	—	.428 ***	−.201 *
容姿無関心	—	—	−.442 **
他者意識	—	—	—

***$p < .001$, **$p < .01$, *$p < .05$

表 2　容姿志向性尺度の下位尺度得点の平均

	全体	男性	女性	
容姿肯定	3.2 (1.1)	3.6 (1.0)	2.6 (1.1)	$p < .001$
容姿無関心	3.7 (1.1)	4.2 (0.9)	3.2 (1.1)	$p < .001$
他者意識	4.5 (1.6)	4.1 (1.2)	5.0 (1.8)	$p < .01$

（ ）内は *SD*

親の養育態度：親の養育態度の 2 因子について内的整合性を確認するために各因子で Cronbach の α 係数を算出した。その結果，養護因子で α ＝ .67，過保護因子で α＝.61 であった。α 係数はやや低いがいずれも.60 以上とある程度の内的整合性は示されたことと，PBI はこれまでに多くの研究で用いられている尺度であるため，そのまま分析に用いることにした。因子間相関は $r = -.366$（$p < .001$）で有意な負の相関が見られた。各因子の下位尺度得点の平均と *SD* を表 3 に示す。回答は 4 段階評定で 2 が「どちらかといえばそうだ」，3 が「非常にそうだ」であったため，養護は 36 点満点中 31.6 点と高くて「非常にそうだ」に近く，過保護は 39 点満点中 27.2 点と中程度で「どちらともいえない」に近かった。養護と過保護のいずれにも下位尺度得点に性差は見られなかった（養護 $t(95) = 0.07$, *n.s.*，過保護 $t(95) = 0.69$, *n.s.*)。

親の養育態度と子の容姿志向性との関連

親の養育態度と子の容姿志向性との関連を子の性別に検討したところ，女性では親の養育態度と容姿志向性との間に有意な相関は見られなかった。一方，男性では過保護と容姿肯定の間に有意な正の相関（$r = .332$, $p < .05$)，

表 3　PBI の下位尺度得点の平均

	全体	男性	女性	
養護	31.6 (4.7)	31.6 (4.6)	31.5 (4.8)	*n.s.*
過保護	27.2 (4.5)	27.5 (5.0)	26.9 (3.8)	*n.s.*

(　)内は*SD*

表 4　PBI と容姿志向性の相関（女性）

	容姿肯定	容姿無関心	他者意識
養護	.100	.196	.039
過保護	.196	−.007	−.089

表 5　PBI と容姿志向性の相関（男性）

	容姿肯定	容姿無関心	他者意識
養護	.025	.010	−.263
過保護	.332 *	.232	.532 ***

***p < .001, **p < .01, *p < .05

過保護と他者意識との間に有意な正の相関（r = .532, p < .001）が見られた。男性においては，過保護に育てられていると容姿を肯定し，他者を意識するということを意味する。

考察

容姿志向性と親の養育態度

容姿志向性に関して，女性は男性より容姿肯定と容姿無関心が低く，他者意識は高かった。女性で容姿肯定が低かったことは先行研究と同様であった（e.g.，島, 1988; 高坂, 2008a; 田中・田山, 2013）。田中・田山・有村（2013）は大学生を対象にした質問紙調査で，感情同定が困難であることと，身体醜形懸念，特に「容姿への否定的評価」に正の相関が見られることを報告し，自分の感情を同定することや感情喚起に伴う身体感覚と感情を識別することの困難さが高いという自身の客観視に欠けていると，容姿への否定的評価も過度に高くなることが示唆されたと意見している。本研究では自身の容姿に関して女性が男性に比べて低い自己肯定にあることが示されたが，女性の容姿肯定の低さに認知の偏りが影響しているかは検討する必要があるだろう。

容姿志向性尺度における各因子間の正負の相関関係は平野・井上(2006)と同様であった。まず，容姿肯定と容姿無関心に正の相関が見られた。これは劣等感が自己の重要領域において感じやすいこと（高坂, 2008a）と一致する。また，容姿肯定と他者意識との間に負の相関が見られたことは，一般的に劣等感は他者との比較で生じることと一致し，大村・小島・中田・沢宮（2015）が女子大学生を対象にした調査で,「容姿に対する評価懸念」は「自分や他人が気になる悩み」と強い正の相関を示したことを報告したことや，田中・田山（2013）で男女共に，身体醜形懸念が高い群において他者からの否定的評価への恐れ，外的他者意識，社会規定的完全主義が高い傾向にあることが示されたことと共通すると考えられる。

養護と過保護間に有意な負の相関が見られ，これは日本の大学生を対象に PBI が行われた研究（e.g., 竹内, 1990）と同様の結果であった。

親の養育態度と子の容姿志向性との関連

女性においては親の養育態度と容姿志向性との関連は見られず，男性においては過保護に育てられたと認識していると自分の容姿を肯定し，他者を意識するということが示唆された。親の養育態度と容姿志向性との関連については，米倉・吉岡(2017)では男女大学生で，前川(2005)では女子学生で過保護が容姿に対する自己評価にポジティブな関連を示していた。本研究でも同様に，男性のみではあるが過保護と容姿肯定がポジティブに関与していた。その理由も,「過保護」が子どもにとって親なりに自分に関心を向けてくれているといった認知につながることで容姿に対する悩みを高めなかったという米倉・吉岡（2017）と同様に考えられるだろう。なお，大和・吉岡(2011)では親から過干渉（過保護）に育てられると身体的魅力はないと評価すると述べられていた。大和・吉岡（2017）と本研究の結果の不一致は，本研究では参加者の養護の値が高くて過保護の値は中程度で，大和・吉岡(2011)の区分でいうと「情愛と自立承認 Hl」の偏っていた可能性があるという参加者の違いが一因と考えられる。男性自身が親の養育態度を過保護であったと認識できることと他者を意識することとのポジティブな関連は，親の養育態度や他者等に対して客観視や再認識が起こったからだと考えることが可能である。

では，なぜ女性では親の養育態度が容姿志向性に関与せず，男性では過保護が容姿肯定および他者意識に関与したのであろうか。その可能性の一つとして，大学生の女性は容姿肯定の低さや容姿関心の高さおよび他者意識の高さに示されるように容姿に対する関心や不安が高い状態にあった。一方で男性に関しては，容姿肯定こそ否定的な値であったが，それでも容姿肯定は女性よりは高く，自分の容姿への関心と他者意識は中程度であり，男

性は女性に比べて容姿志向性の全体の状態としてはバランスが取れていると捉えられる。すなわち，女性よりも容姿に対する過度な関心や不安からは脱却しつつある状態あるいはそもそも女性ほどの深みには陥っていない状態と解釈できる。

親子の段階は 20 代になってからも進み，親も自分と同じ一人の人間なのだという気づきを得たり親の視点に立てたりという段階へ進む（大島, 2014）。こうした時期は再接近あるいは和解等とも呼ばれるが，大学生という青年後期には高校という青年中期で親からの分離を経たて再び親を愛着対象と見なし，親の意見を尊重しようとする（片岡・園田, 2010）。そこで本研究においても発達段階を考慮するため，親の養育態度と容姿志向性に関連が見られた男性において学年別に相関を算出したところ，18-19 歳の 1 年生（N= 20）では過保護は他者意識とのみ有意な正の相関を示したが（r= .423, p< .05），19-20 歳の 2 年生（N= 25）では過保護は容姿肯定（r= .499, p< .05），容姿無関心（r= .529, p< .01），他者意識（r = .490, p< .05）と有意な正の相関を示した[注2]。大学 1 年生から大学 2 年生と発達する中で，親の養育態度を客観視や再認識ができるようになり，親の養育態度が再び容姿に対する評価に影響し出した可能性が考えられる。また，本研究の参加者は養護が高く過保護が中程度だったということも結果に影響している可能性がある。

青年期の親子の発達段階に関する指摘（e.g., 大島, 2014; 片岡・園田, 2010）と本研究での男女及び男子大学生 1-2 年生での親の養育態度と容姿志向性との関連の結果から，容姿志向性に対するバランスがまだ十分に取れていない女子大学生やまだ親への客観視や再認識が十分に進んでいない新入男子大学生では親の養育態度は子の容姿志向性に関与しないが，親子の発達段階が進むと親の養育態度は子の容姿志向性に影響する可能性が考えられた。

本研究の意義および今後の課題

本研究では男女大学生を対象に親の養育態度が子の容姿志向性に及ぼす影響を子の性別に明らかにした。女性では親の養育態度は容姿志向性に関与せず，男性では過保護が容姿肯定と他者意識に関与することが示された。これに対しては，男性では，発達段階の経過に伴い過保護を含み親の養育態度の捉えなおしが進んでいる可能性が考えられた。ただし，この解釈に関しては，子の発達段階や親子の段階における再接近を実際に変数として捉え，実証的に検討する必要があるだろう。

謝辞

本調査にご協力くださった皆さまにこの場をかりて改めて御礼を申しあげます。

注

注 1：本稿は第 2 著者が 2018 年度に東海学院大学人間関係学部心理学科に提出した卒業論文を第 1 著者が再分析し全面的に改稿したものである。

注 2：3-4 年生は 1 名と 3 名と人数が少なかったため，ここでは 1-2 年生のみ分析した。

引用文献

片岡 祥・園田尚子(2010). 青年期における愛着対象の意向における親の位置づけ　久留米大学心理学研究, 9, 1-8.

北村俊則(1995). 臨床研究における手続き―精神症状測定の理論と実際―海鳴社 248-288.

Lambrow, C., Veale, D. & Wilson, G. (2012). Appearance concerns among persons with body dysmorphic disorder and nonclinical controls with and without aesthetic training. Body Image, 9, 86-92.

Littleton, H. L., Axsom, D. & Pury, C. L. S. (2005). Development of the body image concern inventory. Behaviour Research and Therapy, 43, 229-241.

前川浩子(2005). 青年期女子の体重・体型へのこだわりに影響を及ぼす要因―親の養育態度と社会的要因からの検討―　パーソナリティ研究, 13(2), 129-142.

南 博文(1999). 養育態度 心理学辞典 有斐閣 862.

内閣府(2009). 第 8 回青年意識調査　https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/mokuji.html（アクセス日 2019/7/25）

内閣府(2019). 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査 https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h30/pdf-index.html（アクセス日 2019/7/25）

小川雅美(1991). PBI (Parental Bonding Instrument)日本語版の信頼性，妥当性に関する研究　精神科治療学, 6(10), 1193-1201.

大村美菜子・小島弥生・中田洋二郎・沢宮容子(2015). 女性の醜形恐怖心性尺度の作成　応用心理学研究, 40(3), 186-193.

大島聖美(2014). 青年の親に対する認知の重要性―青年期の親子関係研究及び親準備教育の観点から―　広

島国際大学心理学部紀要, 2(1), 69-78.

Parker, G. (1981). Parental reports of depressives. An investigation of several explanations. *Journal of Affective Disorders*, 3, 131-140.

Parker, G. (1983). Parental' affectionless control' as an antecedent to adult depression. A risk factor delineated. *Archives of General Psychiatry*, 40, 956-960.

Parker, G. (1986). Validating an experiential measure of parental style: The use of twin sample. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 73, 22-27.

Parker, G. (1990). The parental bonding instrument: A decade of research. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 25, 281-282.

高坂康雅(2008a). 自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達的変化　教育心理学研究, 56(2), 218-229.

高坂康雅(2008b). 青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情の発達的変化　青年心理学研究, 20, 41-53.

竹内美香(1990). 両親の養育態度と軽度精神症状―Parental Bonding Instrument の妥当性―　精神科診断学, 1(1), 91-100.

田中勝則・田山 淳(2013). 高い身体醜形懸念を有する大学生の対人的な認知の特徴　カウンセリング研究, 46(4), 189-196.

田中勝則・田山 淳・有村達之(2013). 大学生における身体醜形懸念とアレキシサイミアの関連　心身医学, 53(4), 334-342.

平野麻依・井上果子(2006). 青年期女性における容姿志向性―容姿志向性尺度作成の試み―　日本心理学会大会発表論文集 70(0), 3AM159-3AM159.

島 久洋(1988). 青年期の容姿と適応感　青年心理学研究, 2, 12-25.

大和美季子・吉岡和子(2011). きょうだいに対する劣等感と養育態度の認知との関連　福岡県立大学人間社会学部紀要, 20(1), 61-69.

米倉志穂・吉岡和子(2017). 容姿についての悩みと親子関係の関連―容姿に対する被評価経験，養育態度及び信頼感に着目して―　福岡県立大学心理臨床研究, 9, 57-63.

付録 A　容姿志向性尺度(平野・井上, 2006)

容姿肯定

1. 私は自分の容姿に自信がある
4. 私は自分の容姿が好きだ
7. 私は自分の容姿を気に入っている
9. 私は自分の容姿に満足している
11. 私の容姿は魅力的だ
13. 私の容姿を見て振り返る人がいる
15. 私の容姿にあこがれている人がいる
19. 私の容姿は人並みである
21. 自分の容姿の中に気に入っている部分がある
23. 自分の容姿にうっとりすることがある
25. 鏡で自分の容姿を見て,「私って悪くないかも」と思うことがある
26. 私の容姿は人と接する場面で役に立つことが多い

容姿無関心

2. 私は自分の容姿に興味がない
5. 自分の容姿について色々と考えるのは面倒くさい
8. 私は自分の容姿に対し特に何も思わない
14. 自分の容姿を気にかける時間がもったいない
17. 私にとって理想の容姿とは何なのか考えたことがない
20. 私は自分の容姿が整っているかどうか考えたことがない
22. 私にとって自分の容姿を整えるための努力など時間の無駄だ
24. 人と接する場面で私の容姿がどうであるかは関係ない

他者意識

3. 自分の容姿が人からどう評価されるか気になる
6. 自分の容姿と人の容姿を比較しがちである
10. 人と比較して自分の容姿にいらだちを感じることがある
12. 私の生活において，自分の容姿が問題になることはない
16. 鏡で自分の容姿を見て落ち込むことがある
18. 人と比較して自分の容姿に不満を感じることがある

付録 B　Parental Bonding Instrument (小川, 1991)

養護

1. 暖かく，親しみのある声で話しかけてくれた
2. 私が必要とするほどは助けてくれなかった

4. 情緒的には私に冷たいように思えた
5. 私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた
6. 私に優しく，慈愛があった
11. 私と物事について語り合うのを楽しんだ
12. よく私に微笑みかけた
14. 私が必要としたり，欲していることを理解しているようには思えなかった
16. 私は求められていないと感じさせられた
17. 取り乱しているときに気分をほぐしてくれた
18. 私とは多くは話さなかった
24. 私を誉めることはなかった

2, 4, 14, 16, 18, 24 は逆転項目。

過保護

3. 私が好んでしたいと思うことをさせてくれた
7. 私が自分自身で決定を下すのを好んだ
8. 私に成長してほしくなかった
9. 私のすることはすべてコントロールしようとした
10. 私のプライバシーをおかした
13. 私を子どもあつかいしがちだった
15. 私自身に決定を下させた
19. 私を（父・母）に依存させようとしていた
20. （父・母）がいなければ私は自分のことを処理できないと感じていた
21. 私が望むだけの自由を与えてくれた
22. 望むだけ外出させてくれた
23. 過保護だった
25. 私が好むような服装をさせてくれた

3, 7, 15, 21, 22, 25 は逆転項目。

Analysis of Sexual Differentiation and the Effects of Parental Childrearing Style on Self-Rated Appearance of University Students

ADACHI Yuko and YAMAMOTO Kumi

Abstract

It has been pointed out that parenting attitudes affect the self-evaluation of a child's appearance, but there are few studies focusing on the child's gender, despite apparent gender differences in self-evaluations of appearance. The purpose of this study was to examine the effects of parental childrearing styles on a child's self-rated appearance in terms of gender. A questionnaire survey was conducted on 115 university students. Among factors of the self-rated appearance, "affirming appearance" and "indifferent to appearance" were lower for women than men, while "consciousness of others" was higher for women than men. In males, it was shown that the childrearing style of overprotection was positively correlated with self-ratings of "affirming appearance" and "consciousness of others." Men are less likely to be oriented towards appearance than women, and therefore may reframe the parental childrearing style including overprotection approvingly. It is thought that men may be affected by the parenting attitude as the developmental stage progressed.

Keywords: Undergraduates, Self-evaluation of a child's appearance, Parental childrearing style